

現代思想として仏教を見直す本

橋爪大三郎

仏教への関心の高さに比べると、わが国の、インド思想への関心ははるかに低い。

仏教という枠を守り、その内側で問題を掘り下げるのもよい。けれども、日本人のものの見方を相対化しようと考えながら、仏教が本来のインド思想のなかで、どの程度の位置を占めていたのか、きちんと見直しておくことも大切だ。

仏教はわが国で、古来よりなじみ深い。人生の苦悩を背負う人びとが、いまでも仏教に心の拠りどころを求めるのも、無理からぬことだ。思えば千年以上にもわたって、わが国の哲学・思想・宗教・社会運動等々の問題はほとんど、仏教の知的言語を借りて表現されてきたのである。明治以降、仏教の相対的な影響力はさすがに小さくなったとはいえ、日本社会の根底、庶民の信仰や、人びとの死生観には、仏教の厚い沈澱が見られるのだ。ここを十分に掘りおこすのでなければ、日本思想が自律的に展開するのはむずかしい。

インド社会でもっとも強力な思想は、ヒンドゥー教である。とうとう仏教を、吸収同化してしまった。

仏教は数あるインド思想のなかの、ワン・オブ・ゼムにすぎない。インド思想には、他の民族と異なる顕著な特徴があり、その大部分を、仏教もそのまま引き継いでいる。仏教は、輪廻やカースト制など、インド社会の常識的な現実を前提としている。その現実と格闘する思想であることを見なければ、仏教の肝腎な部分はわからない。

仏教を、インド思想の大きな枠のなかで考え、他の思想圏とも対比しながら捉え直していく、という方法論を、比較思想論とよぶことができる。比較思想論を最も系統的、かつ精力的に展開している研究者として、いまわれわれは幸いにも、中村元の業績を手軽に目にすることができるよう（『中村元選集・決定版』春秋社・全32巻・別巻11巻刊行中）。

文化の比較は、人類学の領分でもある。ただ、人類学は、神話や分類体系のような単純な構造の文化項目を扱うことは得意でも、発達した宗教のような、複雑な知識の体系を扱うのは苦手だ。仏教にも、まるで歯が立たない。

そこで、もう少し伝統的な研究方法——宗教学や、比較社会学——に頼らなければならない。

M・ウェーバーが、比較社会学・比較宗教学の輝かしい業績をあげてから、もう一世紀近くたつが、それを上回る仕事は、まだ出ていない。

ウェーバーは、世界の主要宗教の比較を試み、それと経済倫理との関係を追究した。ただ、彼の仕事は未完である。ユダヤ教、儒教、仏教・ヒンドゥー教についてはまとまった記述が残ったが、キリスト教、イスラム教については断片的な考察しか残されていない。その中では、『古代ユダヤ教』（みすず書房）がいちばん出来がよく、『ヒンドゥー教と仏教』（日貿出版社）はあまりよくない。利用できる資料や基礎知識が、あまり十分でなかったのが一因だろう。いっそう根本的には、分析概念の偏りがあると思う。ウェーバーの概念は、たとえば「救済」「予言」などといった概念のように、ユダヤ・キリスト教の分析に都合のよいように出来ている。

もう少しバージョン・アップした、仏教への比較社会学的アプローチが必要だ。

中村元は、ウェーバーと比較にならないくらい、インド思想や仏教圏の思想に通暁している。そして、ウェーバー以降の新しい方法論や研究成果を、十分に踏まえている。彼の仕事は、選集の第一巻が『インド人の思维方法』から始まることでも判るように、仏教をインド文明の宗教的伝統全体のかなかに置きなおそうというものである。このような位置づけこそ、仏教研究に欠落していたものののだ。

もっとも、『インド人の思维方法』について言うと、やや不満が残る。そこでとらわれているのは、サンスクリット語を素材とし、ヨーロッパ語との比較を試みるという方法で、『普通の重視』『否定的表現』『個物および特殊の無視』『万物一体観』……といったテーマを順に追うものだ。それらはなるほど、インド思想と仏教の重要な特質に違いない。しかしそれらが、言語の表層的な文法的特徴に即して論証できるものなのか、疑問に思ふのである。現在の記号学や、文法理論からは、別の結論も導けよう。それでも、今世紀の半ばに早くも、言語に立脚した『思维方法』の比較研究を着想した点で、中村元の業績は卓越している。

*

仏教の教義の内容を、文字どおり真に受けるのではなく、仏教の言説がどういう場所から出てくるのかに注意を払った考察、つまり、比較思想論の先駆は、江戸時代に早くも現れた富永仲基の『出定後語』（岩波『日本思想大系』第43巻）である。この奇蹟的な書物は、フーコーの系譜学にも通じる言説分析の視点を、数世紀さきにかけて実践したものだ。

言説分析の観点から仏教をみると、いちばん問題になるのは、非仏説論である。明治以降でこそ、大乘非仏説は常識であるが、江戸時代に早々とそれを主張した富永仲基は、乏しい資料を自在に読み抜くなかから、初期仏教の置かれていた状況（インド社会の知的編成）を再構成したわけで、天才的と言わなければならない。

彼がインド思想のなかに認めた、言説が増殖するダイナミズムは、「加上」の原理だった。加上とは、すでに流布している言説に対して、それと差異化をはかりうる言説を対置し、その先を行こうとすること。有↓空、須弥世界↓小千世界・中千世界・大千世界↓そのほかの十方世界、などはみな加上による言説の膨張の例である。

大乘非仏説論のゆえに、信仰としての仏教は、特に知識階層の人びとのあいだで、深刻な打撃を受けた。信仰と科学の

あいだで苦悩するのが、すぐれた宗教学者の条件だとすれば、すぐれた仏教学者が現れにくい理由は、ここにあるかもしれない。だが、キリスト教の場合にも、似たような事情はあるのであり、仏教学者の言い訳にはならないと思う。キリスト教徒の場合、聖書は神の言葉、イエス・キリストの言葉として、信仰の中心に位置する。それを、聖書史学や聖書考古学は、歴史的に構成されたものの、他の宗教、他の伝承の影響下に、人間たちが形成したものともみなす。死海文書の発見によって、その方法は万全の根拠をもった。でもそのために、キリスト教の信仰が、精彩を失ったとは聞かないではないか。

*

日本の仏教が変質し、信仰として、思想としての命脈を断たれたのは、幕藩制の成立によるところが大きい。その淵源をさらにさかのぼると、政治と宗教との関係が、仏教とキリスト教とはまるで異なっていたことが、あげられると思う。しかもそこに、日本人に固有の宗教上の心性——日本教とでもいうべきもの——がつけ加わる。この懸隔をすっかり踏まえないと、西欧思想の受容を試みるにしても、日本思想の自立的な発展を引き受けるにしても、狂いが生ずる。

その点、刺戟を受けながら読めるのは、山本七平の仕事だ。ユダヤ教の理解がずさんである、などの批判もあるが、そう

いう点に注意して読めば、きつと有益だろう。

たとえば、『勤勉の哲学』（PHP研究所）。副題を「日本人を動かす原理」というのだが、企業活動の前提となる発想や日常の信念で、日本人の経済倫理の核心をなす部分を、ウェーバーのエートス論を補助線にしながら、追究しようというものである。そして俎上にのぼせるのが、鈴木正三の禅の思想、石田梅岩の心学の思想だ。

キリスト教の場合、世俗の経済活動に宗教上の価値を認め、社会的にも承認を与えるには、宗教改革をまたなければならなかった。ルターの職業召命観が、資本主義を準備したと言ってもよい。

日本の場合、厳密に宗教改革に匹敵する変動は、経験されなかった。それなのになぜ、勤勉はこれほど社会的に正当化されているのか。もともとそうだったのか。

禅宗がそのすべての原因であるとは言えないにしても、日本人が、禅のなかに、自分たちの職業観、労働観の表現を見出してきたことはあきらかだ。禅は、仏教の言説の展開の系譜の正流に位置せず、中国で開始された新しい展開である。その断層が、日本の勤勉の倫理に接続されているとするならば、日本の近代の可能条件のひとつとして、近世仏教の果たした世俗的な機能に、目配りは欠かせないだろう。

*

仏教の蛇行し伏流する水脈をさかのぼることは、日本人の精神世界の歴史を再構成するうえで、欠かせない作業だ。その作業には、仏教の信仰を、客観的な出来事として語り直す言葉が、どうしても必要はらずである。

最後に手前味噌の宣伝をしておくと、私の『仏教の言説戦略』（勁草書房）は、そうした試みのひとつだ。あまり読みやすい本ではないが、書いてあることは明快なはずである。

問題は、信仰を、外的視点から理解することである。そのために、哲学者ヴィトゲンシュタインの、言語ゲームのアイデアを援用してみた。このアイデアは、社会のもつとも簡単な記述手段を与えるので、仏教にとどまらず、イスラム教、キリスト教、儒教と、各宗教の比較を試みる場合に、有効だと思う。西欧思想のめまぐるしい流行に、いたずらに敏感であるよりも、そういう基本的な作業をつみ重ねることのほうが、大事ではないか。

『仏教の言説戦略』では、初期大乘の段階までしか扱っておらず、大きなことは言えない。いずれ密教、中国仏教、日本の諸宗派まで追いかけることができれば、日本をもう少し深く、もう少し分かりやすく、たとえば外国の人びとも提示することができるとも思えない。